道徳授業を成功させよう

# 知って役立つ発達心理学

渡辺弥生
Yayoi Watanabe
（法政大学教授）

## 第4回 人はなぜ、時に望ましくない行動を取ってしまうのか

「いじめはよくない」という規範意識は、小学生でももっています。ですが、実際には、クラスの中でいじめが起きていることは少なくありません。その原因は一つではありませんが、子どもたちが自分を律することが難しいことにあります。

### 自分を律する力を弱めてしまうメカニズム

人には、自分に「非」があると考えるのを回避しようとするところがあります。自分の落ち度を最小限にしようとするのです。

この原因として、四つのメカニズムがあると考えられています。下の図を参照ください。

①は、望ましくない行為を引き起こす「行為の再解釈にかかわるメカニズム」です。例えば、「平和のために戦おう」「未来のために戦おう」という表現は、「道徳的正当化」に当たります。戦争を煽（あお）るリーダーは「人を殺（あや）めに行こう」とは決して言いません。民が心地よいと感じる言葉を巧みに用いるのです。

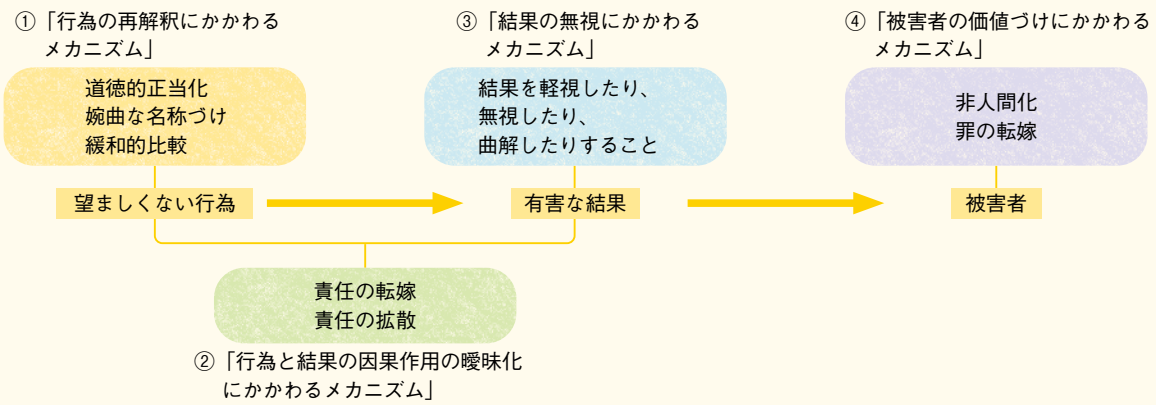
「リストラ」を「適正規模化」という婉曲（えんきょく）的な言葉に置き換えたり（婉曲な名称づけ）、政治家が悪政を行った人を引き合いに出して比較し、自分を正当化すること（緩和的比較）も、自分の行為の再解釈です。

②は、望ましくない行為や有害な結果をもたらすことにつながる「行為と結果の因果作用の曖昧化にかかわるメカニズム」です。「赤信号 みんなで渡れば怖くない」（責任の拡散）という意識や、親自身の問題を子どものせいにする（責任の転嫁）などがそれに当たります。

③は、有害な結果をもたらすことにつながる「結果の無視にかかわるメカニズム」です。例えば、便宜供与した政治家が、具体的な計画や実行は秘書などに任せるといった場合、政治家本人は実際に行動していないことから、比較的、結果を無視することができ、罪悪感も弱くなります。

④は、「被害者の価値づけにかかわるメカニズム」です。相手を自分と対等な存在、同じ気持ちや価値観をもつ存在として位置づけなかったり（非人間化）、自分が悪いのにもかかわらず、相手に原因を求めたりすること（罪の転嫁）をいいます。

人には、こうした自分を律する機能を弱めてしまう働きがあることを、まずは理解しましょう。そのうえで、自分や他人がそうした行動に陥っていないかを判断する目をもつことが必要です。

ただし、このような道徳的な判断や行動のコントロールは、大人でも難しいことです。ですから、ここで紹介したような事例を取り上げ、子どもたちに「あ、よくやってしまっているな」「自分が正しいと思っていたけど、間違いだ」と気づかせることが大切です。

渡辺弥生●わたなべ やよい
発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体――発達心理学で気持ちをマネジメントする』（筑摩書房）、『子どもの「10歳の壁」とは何か？　乗りこえるための発達心理学』（光文社）など。監修に『まんがでわかる発達心理学』（講談社）など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。